

じゃじゃ馬は馴らされたのか —『じゃじゃ馬馴らし』より

外国語学部 英語英文学科4年

高柳 結

序論

『じゃじゃ馬馴らし』はそのタイトル通り、男がじゃじゃ馬と呼ばれる女を馴らす物語である。家父長制が浸透していた当時としては当たり前とされていた、男が強くて女が弱い、そんな男女の主従関係を絵に描いたような物語である。しかし、本当にそうだろうか。じゃじゃ馬女は本当に、そのじゃじゃ馬と呼ばれる原因の「強さ」を捨てて、男たちの言うか弱い「理想の女性」へと馴らされてしまったのだろうか。確かに、この物語には、じゃじゃ馬女がそれ以上に強い男に、従順な「理想の女性」へ馴らされるという主軸があるが、その過程にはその答えにつながるヒントが散りばめられている。この論文では、『じゃじゃ馬馴らし』の登場人物の心情とその関係性を読み取り、この物語が示す「理想の女性像」とは何なのか、じゃじゃ馬女は本当に、その「理想の女性」へと変わったのか、この2点について考察していく。

キャタリーナとビアンカ

初めに、『じゃじゃ馬馴らし』においてのキャタリーナとビアンカについて考察していく。特に、第一幕第一場はそれぞれの登場人物の第一印象が決まる、重要なシーンである。この場面で、キャタリーナとビアンカはどのように描かれているのだろうか。

KATHERINE “I pray you, sir, is it your will To make a stale of me amongst these mates?”

HORTENSIO “‘Mates’, maid? How man you that?

NO mates for you Unless you were of gentler, milder mould.”

KATHERINE “I’ faith, sir, you shall never need to fear. Iwis it is not her care should be To comb your noddle with a three-legged stool And paint your face and use you like a fool.” (1.1.57-65)

キャタリーナ 「お父様、どういうこと、私をこんな男たち相手のなぐさみものにするつもり？」

ホーテンショー 「相手ですと？あなたね、もっと淑やかでおとなしくしなきや相手は見つかりませんよ。」

キャタリーナ 「なにより、あなたになんか心配してもらわなくて結構。キャタリーナにはそんな気はありませんから。だけど万一結婚する気になれば、ちゃんと面倒みてあげます、その頭を三脚椅子でガツンと撫でてあげるし、その頭をひっかいて、傷と血のお化粧で阿保面にしてあげる。」 (1.1.33)

この会話は、キャタリーナが登場する最初の会話である。セリフにしては、強烈すぎるほど乱暴で、印象に残るセリフである。父親に反抗する態度からして、彼女の気の強さがあふれ出ている。従って、誰が見ても、彼女の第一印象は「気の強い女」であろう。さらに、客を前にして発するような言葉ではないし、女性が口にする言葉でもないだろう。それにもかかわらず、こうした乱暴な言葉をかけられるということから、それほど気が強いことが分かる。

また、客の前では、礼儀正しくすることは、当然のことだろう。しかし、キャタリーナはこうして自分の気持ちを露わにし、乱暴な言葉を口にしている。ここに、彼女の子供っぽさを感じることができる。彼女がなりふり構わず自分の気持ちをぶつける姿は、まるで子供のようである。また、キャタリーナの、"A pretty peat! It is best put finger in the eye, and she knew why."(1.1.78-79)「甘やかされて言い気になって！何かといっちゃん嘘泣きするのが得意なくせに。」(1.1.35)というセリフからも、彼女の子供っぽさがにじみ出ている。このセリフは、父親にかばわれるビアンカに対して発したものであるが、彼女がビアンカに対して嫉妬心を露わにする様子が見られる。気に障ることがある度に感情を露わにするのは、結婚のできる年頃の娘にしては少し子供っぽさがあるように感じられる。従って、キャタリーナの言動から、彼女がどれだけ気の強い女性なのかを読み取ることができる。また、礼儀を示すべき相手や、家族に対して、なりふり構わず自分の気持ちを露わにする様子から、彼女の子供っぽさを読み取ることができる。

次に、ビアンカである。

BIANCA "Sister, content you in my discontent. Sir, to your pleasure humbly I subscribe. My books and instruments shall be my company, On them to look and practice by myself." (1.1.81-83)

ビアンカ「お姉様、我慢して、私だって辛いんだから。お父様、お言いつけに従います。これからは書物と楽器を友として、一人きりで読書と音楽にはげみます。」(1.1.34-35)

このセリフから、彼女には目上の人物に対する礼儀と、従順さがあることが分かる。また、キャタリーナに嫉妬心をぶつけられても反抗することなくキャタリーナをなだめている様子から、ビアンカが、物事に動じない落ち着いた性格の持ち主であることを読み取ることができる。また、第一幕第一場では、ビアンカのセリフはほとんどない。そのため、彼女は、キャタリーナのように自分の思ったことをすぐ

に口にするのではなく、自分の気持ちを内に抑えることのできる、忍耐力と冷静さがあることが分かる。従って、ビアンカは、従順で礼儀正しく、忍耐力があり、落ち着いていて、理性のある性格であると読み取ることができる。

男性が抱く「理想の女性像」

気が強く、乱暴で、子供っぽさのあるキャタリーナと、従順で礼儀正しく、忍耐力があつて冷静なビアンカ、2人は姉妹でありながら正反対の性格である。この正反対の姉妹を、男性陣はどのように見ているのだろうか。2人それぞれに対する態度から読み取っていく。キャタリーナに対して、ホーテンショーは、「相手ですと？あなたね、もっと淑やかでおとなしくしなきゃ相手は見つかりませんよ。」(1.1.33)と言っている。この言葉からホーテンショーは、キャタリーナに女性として「お淑やかでおとなしく」いてほしい、そういう女性が「結婚ができる」女性であると考えていると読み取れる。また、彼は、"From, all such devils, good Lord deliver us!"(1.1.66-67)「こんな悪魔から、神よ、お守りください！」(1.1.33)や、"Faith, as you say, there's small choice in rotten apples."(1.1.128)「ええ、おっしゃるとおり、腐ったリンゴを食いたがる男はいません。」と言っている。これらのセリフは、キャタリーナの淑やかさやおとなしさのない性格を否定し、彼女を悪魔や腐ったリンゴなどという酷い呼び方をして、けなしている様子が読み取れる。

GREMIO "I say a devil. Think'st thou, Hortensio, though her father be very rich, any man is so very a fool to be married to hell?"(1.1.120-121)

グレミオ「悪魔ですったら。考えてもみろ、ホーテンショー、いくら親父が金持ちだからって、地獄と結婚するバカはいない。」(1.1.37)

これは、グレミオのセリフであるが、ホーテン

ショーと同じくキャタリーナを悪魔や地獄呼ばわりしている。2人のセリフから、彼らがキャタリーナの気が強くて乱暴な性格を否定していることが分かる。

一方、ビアンカに対してである。ルーセンショーは、ビアンカのことを "Hark, Tranio, thou mayst hear Minerva speak!" (1.1.84) 「聞いたか、トラニオ、女神ミネルヴァが口をきいた。」 (1.1.35) というように、ビアンカを女神と呼び、グレミオーは "my sweet Bianca" (1.1.108) 「かわいいビアンカ」 (1.1.37) と呼んでいる。これらのセリフから、男性陣は、ビアンカに女性として好意を抱いていることが一目瞭然である。つまり、ビアンカの従順で礼儀正しく寡黙な性格を肯定していることが分かる。

2人に対する男性たちの態度を比較すると、男性が抱く女性の理想像が見えてくる。

TRANIO "Husht, master, here's some good pastime toward; That wench is stark mad, or wonderful forward."

LUCENTIO "But in the other's silence do I see Maid's mild behaviour and sobriety." (1.1.68-71)

トラニオ 「シッ、旦那様、何だか面白くなってしまったよ。あの娘は完全にいかれているか、さもなきや素晴らしいひねくれ者だ。」

ルーセンショー 「だがもう一人の沈黙の中には娘らしい穏やかな物腰と真面目さが透けて見える。」 (1.1.34)

このやり取りには、男性が求める「娘（女性）らしさ」を読み取ることができる。ビアンカの、おとなしくて穏やかで真面目な雰囲気がにじみ出る性格は、男性陣にとって「理想の女性」そのものなのである。理想通りの女性だから、男性たちはこぞって好意を見せるのである。対照的に、気が強くて乱暴な態度を見せるキャタリーナは、男性たちにとって「いかれた」「ひねくれ者」なのである。キャタリー

ナの気が強くて荒々しい性格は、女性として「いかれた」性格なのである。そのため、男性たちはキャタリーナを毛嫌いするのである。また、ペトルーチオについてである。

PETRUCHIO "And, honest company, I thank you all That have beheld me give away my self To this most patient, sweet and virtuous wife." (3.2.183-185)

ペトルーチオ 「ご列席のみなさん、ありがとう、誠実なみなさんの立会いのもと、私がこの身を捧げると決めたのはこの上なく忍耐強く、優しく、貞淑なこの妻です。」

これは、披露宴でのペトルーチオの言葉だが、この時点ではキャタリーナはどう考えても「忍耐強く、優しく、貞淑な」妻ではない。しかし、ペトルーチオはキャタリーナのことを「忍耐強く、優しく、貞淑な」妻であると断定した。私は、これはペトルーチオの理想の女性像なのではないかと考える。お金さえもらえれば、どんな女性と結婚しても構わないというような態度を見せていたペトルーチオだが、彼の心の中にも「理想の女性像」があったのではないかと考えられる。

ここで、なぜペトルーチオはキャタリーナのことを、そうではないのに、あたかも「忍耐強く、優しく、貞淑な」妻であるかのように公言したのだろうかという疑問がある。「女は結婚前は父親に、そして結婚後は夫に管理されていた。父親や夫は厳しい現実から女たちを守るべき存在であった。女は倫理的にも経済的にも父親や夫に依存して生きていくべきであり、彼らに尊敬の念をもって従うように教育された。」¹ このように、当時のイギリスでは、男女の役割・るべき存在は確立していた。女性は、男性に管理され、守られる存在であった。私は、ペトルーチオはキャタリーナを、この「女性の役割」という型に無理やりはめ込み、キャタリーナを管理しようとしたのではないかと考える。男性が女性を管理できる条件として、女性は「忍耐強く、優しく、

1 小林かおり『じゃじゃ馬たちの文化史—シェイクスピア上演と女の表象』p.41

貞淑」でなければならなかった。前述にもある通り、ホーテンショーも「相手ですと？あなたね、もっと淑やかでおとなしくしなきゃ相手は見つかりませんよ。」(1.1.33)と言っている。「忍耐強く、優しく、貞淑」ではないキャタリーナを、「忍耐強く、優しく、貞淑な」女性へ変えることがペトルーチオの目標で、その目的は、キャタリーナを管理下におくためなのである。

「キャタリーナ」という人物

気が強くて乱暴な性格を持つ、「いかれた」女性であるキャタリーナは、最終的にペトルーチオと結婚する。ここに至るまでに大きく変化を見せる登場人物はキャタリーナただ一人である。なぜ、キャタリーナは「いかれた」女性から「理想の」女性へと変わったのか。まず、キャタリーナの性格、気質をより詳細に読み取っていく。前述で、キャタリーナの第一印象として「気の強い」「子供っぽさ」のある女性であることを説明した。しかし、彼女のセリフをさらに深く掘り下げていくと、また別の印象を読み取ることができる。

最初に、次の会話である。

KATHERINE “ ‘Moved’-in good time! Let him that moved you hither Remove you hence. I knew you at the first You were a movable.”

PETRUCHIO “Why, what’s a movable?”

KATHERINE “A joint stool.”

PETRUCHIO “Thou hast hit it. Come sit on me.” ...

(2.1.191-194)

キャタリーナ「運んできた、へえ！じゃあ、あなたをここまで運んできた足にここから運び出してもらひなさい。一目見て分かったのよ、あなたが持ち運びできるって。」

ペトルーチオ「持ち運びできるってこと？」

キャタリーナ「折りたたみ椅子。」

ペトルーチオ「うまい。じゃあ、この膝に乗っかれ。」

…(2.1.81-82)

この会話は、キャタリーナとペトルーチオが始めて会った際のもの一部である。2人は、少々長い会話を交わす。その内容は、キャタリーナはペトルーチオを貶し、ペトルーチオはキャタリーナを褒めるといったちぐはぐな内容だが、会話は成り立っている。そして、「折りたたみ椅子」といった例えや、ペトルーチオの“Should be! Should-buzz!”(2.1.202)に対しキャタリーナの“Well tane, and like a buzzard.”(2.1.203)といった言葉遊びを交え、非常にユニークなやり取りである。その上、お互い隙を見せずにテンポよく会話が進む。このやり取りから、彼女の地頭の良さが読み取れる。キャタリーナと婚約を交わすために休みなく、我的強い姿勢で攻めてくるペトルーチオに対して劣らずに、ひるまずに会話を続けられるキャタリーナには、それほどの語彙力と頭の回転の速さがあると読み取れる。

KATHERINE “I told you, I, he was a frantic fool,
Hiding his bitter jests in blunt
behaviour. And to be noted for a
merry man, He’ll woo a thousand,
‘point the day of marriage, Make
feast, invite friends, and proclaim the
banns, Yet never means to wed where
he hath wooed.”(3.2.12-17)

キャタリーナ「だから言ったでしょう、あれは逆上した大馬鹿よ、がさつな態度の裏に人を馬鹿にする毒を隠して。愉快な男という評判をとろうとして、手当たり次第に結婚し、式の日取りを決め、披露宴だ、招待客だ、結婚予告だと騒いでおいて、求婚相手と結婚する気はさらさらない。」(3.2.106)

これは、キャタリーナとペトルーチオ2人の結婚式直前になんてペトルーチオが表れず、キャタリーナが苛立ちを見せる場面でのセリフである。彼女は、ペトルーチオという男がただのがさつできちがいな男ではなく、そのがさつな態度の裏で人を馬

鹿にしているのだと言っている。つまり、彼女はペトルーチオの表面上の態度の、その裏の心情まで見ているのが分かる。ここには、彼女に相手の気持ちを理解する力があることが読み取れる。彼女は周囲に対して乱暴な言動や態度をとるため、一見、人の気持ちを理解できていないように見える。しかし、このセリフからは、一度会っただけのペトルーチオの心理を理解していると分かる。

また、気が強くて子供っぽさの見える、じゃじゃ馬キャタリーナだが、彼女のその子供っぽさはネガティブ思考の上で成り立っていると考える。「ネガティブ」といえば、気が弱そうなイメージを持つだろう。そのため、気の強いキャタリーナとは、無縁な言葉に見える。しかし、彼女のセリフをよく見て見ると、度々ネガティブ思考が表れている。例えば、次のセリフである。

KATHERINE “What, will you not suffer me? Nay, now I see She is your treasure, she must have a husband. I must dance barefoot on her wedding day And, for your love to her, lead apes in hell.”(2.1.31-34)

キャタリーナ 「あら、邪魔をなさるの？ はあ、これで分かった、妹はお父様の宝物、夫を持つに決まってる、売れ残りの私はあの子の結婚の日に裸足で踊るに決まってる、お父様は妹ばかりかわいがるから、私は猿を引き連れて地獄へ行くんだわ。」(2.1.69-70)

このセリフでは、キャタリーナの妹ビアンカへの嫉妬心が強く表れている。そして、「ビアンカは結婚できても、自分は生涯結婚できない」といった、自分を卑下する様子が読み取れる。前述した、キャタリーナ自身の結婚式直前にペトルーチオが現れない場面でも、「(ペトルーチオは自分と) 結婚する気なんてさらさらない。」と言ってぐずついていた。嫉妬であれこれ暴言を吐いたり、ぐずついた様子を見せるのはまるで子供のようだが、この子供っぽさの奥には彼女のネガティブ思考があると分かる。

従って、キャタリーナは気の強い性格であるが、ネガティブ思考という弱さを持っていると言える。

キャタリーナの第一印象として、気が強くて乱暴な、じゃじゃ馬であることを挙げた。しかし、その「じゃじゃ馬」キャタリーナの奥底には、「頭が良く」、「相手の気持ちを理解する力」があり、ネガティブ思考という「弱さ」を持つ女性であることが、彼女の言動から読み取れる。

最後に、なぜキャタリーナは周囲に対して乱暴な態度をとるのだろうか。この疑問について考えていきたい。これについて、私は、二つの説を挙げたい。一つ目は、周囲の人々を困らせるためであると考える。キャタリーナは、自分に対する周囲の人々の態度、例えば、妹であるビアンカとの扱いの違いなどが気に食わない。従って、そうした周囲の人々を困らせるために乱暴な態度をとるのである。相手の気持ちを理解していても、相手の嫌がることをしないとは限らない。彼女は、周囲の人々の気持ちを理解した上で、故意に、こうした態度をとっているのだと考えられる。二つ目は、「女」だからといって馬鹿にされたくないという思いがあったからである。次のセリフを見てみる。

KATHERINE “I see a woman may be made a fool If she had not a spirit to resist.”
(3.2.209-210)

キャタリーナ 「分かってます、反抗する根性がなければ女は馬鹿にされるんです。」
(3.2.121)

このセリフからは、彼女の女性としての思いがにじみ出ている。当時は「忍耐強く、優しく、貞淑な」女性がよしとされ、それが当たり前となっていた。男女かかわらず、それが当たり前であるがゆえにそこに疑問を抱く者はほとんど居なかつたのだろう。「自分の言葉をもつ女性は、男性の権利を不當に侵害するものとみなされた。『じゃじゃ馬ならし』のなかで、ケイトの毒舌が男性中心社会を脅かすものとして忌み嫌われたのも当然のことであった。言葉は男性の主権を搖るがす脅威としてとらえられたの

である。」² このように、当時の男性は、女性が主張をすることで男性の権利が弱まってしまうことを恐れたのである。そのため、権利を侵害される心配のない寡黙で従順な女性がござって好まれたのである。私は、そんな中で、キャタリーナはこうした男女の格差に疑問と不満を抱いたのだと考える。なぜ、男性が優位なのだろうか。女性が男性と対等になるにはどうしたらよいのだろうか。キャタリーナなりに考えた結果、行きついたのが「反抗する根性」であったのだろう。ここでの「反抗」とは主張することを意味すると考えられる。寡黙・従順=主張しないのが女性らしさ。キャタリーナは、この「女性らしさ」というものが、そもそも気に食わなかったのではないだろうか。

しかし、キャタリーナはペトルーチオとの結婚後、人が変わったように変化をとげる。ペトルーチオの言うこと素直に聞き入れる、従順な女性へと変わるのである。「分かってます、反抗する根性がなければ女は馬鹿にされるんです。」(3.2.121)と言っていたはずのキャタリーナは、なぜ、これほど変わってしまうのだろうか。次の会話は、パブディスタの家へと戻る道中、ペトルーチオがキャタリーナの態度に気分を害した際のものである。そのとき、ホーテンショーに「言われたとおりに言いなさい、さもないと先へ進めませんよ。」(4.5.171)と言われ、キャタリーナは態度を一変させる。

KATHERINE “Forward, I pray, since we have come so far. And be it moon or sun or what you please; And if you please to call it a rush-candle, Henceforth I vow it shall be so for me.”

PETRUCHIO “I say it is the moon.”

KATHERINE “I know it is the moon.”

PETRUCHIO “Nay then you lie, it is the blessed sun.”

KATHERINE “Then God be blessed, it is the blessed sun. But sun it is not, when you say it is not, And the moon

changes even as your mind. What you will have it named, even that it is, And so it shall be so for Katherine.”
(4.5.12-22)

キャタリーナ「お願い、進みましょう、せっかくここまで来たんだもの、月でも太陽でも、何でもあなたの好きなものでいい。あれがロウソクだと言いたいなら、これからは誓って私もそう呼びます。」

ペトルーチオ「あれは月だと言つただろ。」

キャタリーナ「もちろん、あれは月よ。」

ペトルーチオ「おい、嘘つけ。あれはありがたい太陽だ。」

キャタリーナ「神様ありがとう、じゃあ、ありがたい太陽よ。でもあなたが違うと言えば、太陽じゃない、だって月は移り変わる、あなたの心と同じように。あなたがこうと名づければ、何だってそうなるのよ、そしたら、キャタリーナもそう呼びます。」
(4.5.171-172)

この場面から、明らかにキャタリーナはペトルーチオに対して従順な態度を取り始めている。彼女は「女性らしさ」の欠けた女性から「女性らしい」女性へ、まるで別人のように変化を遂げる。彼女は、「女」だからといって馬鹿にされたくないという思いを捨て、諦め、従順な女性らしい女性になってしまったのだろうか。私は、それは違うと考える。ある程度の教養が身についており、地頭の良いキャタリーナは、「女」だからと馬鹿にされずに済む、別の手段に気づいたのである。それは、まずは「女」として称えられる存在になることである。これまでのキャタリーナは、思ったことをすぐに口にし、感情のままに暴力を振るい、自分の思いを主張していた。しかし、それではそもそも周囲の人々は耳も貸さず目もくれず、自分の主張が届かない。それをペトルーチオとの結婚生活で思い知ったのではないだろうか。ペトルーチオとの結婚生活で、彼女は何度か主張をしている。それも“Patience, I pray you. 'Twas a fault unwilling.” (4.1.127)、“I pray you, husband, be not so disquiet.” (4.1.139)といったよう

2 小林かおり、『じゃじゃ馬たちの文化史—シェイクスピア上演と女の表象』、p.31

に “I pray you.” を使って懇願する様子が見られる。それでも、ペトルーチオは聞く耳を持たないのである。こうした経験を通して、彼女は、今の自分がいくら主張をしても聞いてもらえないことはわからぬことに気づいた。では、どうすれば自分の主張を聞いてもらえるのだろうか。それには、主張を聞いてもらえるような、人々から称えられる良き女性にならなければいけないと気づいたのだ。そのため、彼女は、ペトルーチオのめちゃくちゃな物言いを全て肯定し、聞き入れ、従順な良き妻へと変わったのだ。

「従順な」キャタリーナのスピーチ

最後に、物語終盤のキャタリーナのスピーチについて考察していく。

KATHERINE “Thy husband is thy lord, thy life, thy keeper, Thy head, thy sovereign; one that cares for thee And for thy maintenance; commits his body To painful labour both by sea and land, To watch the night storms, the day in cold, Whilst thou li'st warm at home, secure and safe, And craves no other tribute at thy hands” (5.2.146-152)

キャタリーナ 「夫はあなたの主人、あなたの命、あなたの保護者、あなたの頭、あなたの君主として、あなたのためを思い、あなたを養うために心をくだき、体を張って海でも陸でも辛い仕事に励んでいる、嵐の夜は一睡もせず、凍えるような日も働きづめ、その間あなたは何の心配もなく家でぬくぬくしている。」 (5.2.200)

この部分は男性のるべき姿・役割を語っているのだが、これは、「男性の役割」を改めて示唆している

いるとも見ることができる。小野氏はこれについて、次の意見を述べている。「彼女の説教の中では、夫のるべき姿も同時に定義され、〈理想の妻〉を持つことができるのではなく、〈理想の夫〉という条件づけが行われている。「妻が安樂に暮らせるよう、身を粉にして、海に陸に働き続ける」男こそ、〈理想の妻〉を持つことのできる夫であり、その夫に対して、女は「家でぬくぬくと手足を伸ばして」いても〈理想の妻〉なのだ。」³つまり、女性は「寡黙」で「従順」でなければならないという条件があるよう、男性は主人として女性を守り、辛い仕事に励まなければいけないという条件があることを示しているのである。物語の中では「おとなしくしろ」だの「口応えするな」だの、女性ばかりが条件をつけられとやかく言われているが、男性にも果たすべき役割があることを、改めてこの公衆の面前で掲げたのではないかと考える。

KATHERINE “And when she is froward, peevish, sullen, sour, And not obedient to his honest will, What is she but a foul contending rebel And graceless traitor to her loving lord?” (5.2.157-160)

キャタリーナ 「意地を張ったり、すねてひねくれたり、嫌な顔をして夫の真っ直ぐな意思に逆らったり、そんな妻はいったいなんでしょう、夫の敵に回る汚い謀反人、思いやりのある君主に恩を仇で返す反逆者ではありませんか？」 (5.2.201)

この部分では、一見、男性に反抗する女性は悪人であるといった旨を語っている。しかし、裏を返せば、これまた男性のるべき姿を提示している。男性は、「思いやりのある君主」であるべきということである。「思いやり」、つまり、夫と妻という一つの主従関係の間には、「愛」が必要であることを、彼女は述べているのだ。

3 小野良子、「キャタリーナのストーリーー『じゃじゃ馬ならし』を読み直す」、p.44

KATHERINE "I am ashamed that women are so simple To offer war where they should kneel for peace, Or seek for rule, supremacy and sway, When they are bound to serve, love and obey." (5.2.161-164)

キャタリーナ 「私は恥ずかしい、女がこんなに愚かだということが、ひざまずいて平和を求めるべき時に戦争を仕掛け、仕え、愛し、従うべき時に支配しようとしたり、権力を握って統治しようとするのだもの。」 (5.2.201)

KATHERINE "My mind hath been as big as one of yours, My heart as great, my reason haply more, To bandy word for word and frown for frown. But now I see our lances are but straws, Our strength as weak, our weakness past compare, That seeming to be most which we indeed least are." (5.2.170-175)

キャタリーナ 「以前は私も誰かさんみたいに自己主張が強く、頭でっかちで高慢で、多分あなたたち以上に理屈をこね、いちいち口応えしたり、睨み返したりしていました。でも、ようやく分かりました、私たちの振り回す槍は藁しべにすぎない、力だって藁しべ並に弱くて、その弱さときたら話にならない、精一杯伸びをして見せても、本当はとても小さいのです。」 (5.2.202)

この部分は、キャタリーナが自身の過去の振る舞いとそれが過ちであったと気づいたことを述べている。言いたいことをなりふり構わず口にしていたキャタリーナだったが何を言っても何をしても、周囲の人々、特にペトルーチオは相手にしなかった。この経験を通して、彼女はようやくこれが間違いで

あることに気が付いたのだ。女性という立場で男性のように振る舞っても、「愚かな女」、「おかしな女」だと言われて相手にされない。むしろ馬鹿にされてしまう。「女」だからといって馬鹿にされることを、キャタリーナは嫌がったのである。従って、キャタリーナは夫であるペトルーチオの言うことを従順に聞き入れ、自分の立場を守ったのである。

キャタリーナの「主人たる夫への義務」についてのスピーチを聞き、ペトルーチオは「いい子だ、いい子だ！」(5.2.202)と言ってキャタリーナを褒める。また、ヴィンセンショーも「子供たちが素直だというのは、いつ聞いてもいいものだ。」(5.2.202)と言ってキャタリーナとビアンカ両方のことを「素直だ」と褒める。では、ここで金城氏の考察である。「従順を説くカタリーナの弁舌そのものが、彼女の積極性、力強さの発露となっていて、「ならされても」けつして人形には成り下がっていないことを証明している。」⁴ この意見を踏まえると、キャタリーナは完全に素直な、従順な女性になったとは言えないだろう。確かに、彼女はペトルーチオの命令を受けてスピーチをした。しかしながら、そのスピーチの内容は、嘘か誠かはさておき、キャタリーナ自身の「主張」なのである。従って、彼女は、従順な女性になることで男性陣に認められ、褒め称えられ、女性という立場でありながら「主張」のできる存在へと変わったのである。

結論

『じゃじゃ馬馴らし』において、「理想の女性像」とは「寡黙で従順な」女性であることが分かる。これはビアンカの男性陣からの支持を見れば明らかだろう。しかし、この物語はそんな単純なものではない。まず、「理想の女性像」とは、男性の都合の上に存在しているのである。「寡黙で従順な」女性のほうが、管理がしやすく好都合なのだ。そんな「寡黙で従順な」女性とはかけ離れたじゃじゃ馬キャタリーナと、ペトルーチオが結婚するのがこの物語の

4 金城盛紀、『シェイクスピアの喜劇—逆転の願い—』、p.24

主軸である。キャタリーナとペトルーチオの関係を見ると、当時の女性には「女性らしさ」＝「寡黙・従順であること」が必要とされていたことが示唆されているように見える。キャタリーナがペトルーチオによって「理想の女性像」という型に押し込まれ、変わっていく様は、女性が「女性らしい」振る舞いを強制されていたことを示していると考えられる。一方、ペトルーチオは、物語の始めと終わりを比較しても、特に変化は見られない。従って、女性だけが「女性らしさ」を強制されていたように考えられる。そこで、キャタリーナの物語終盤のスピーチである。女性が女性の役割を果たさなければいけない、対して男性も女性を守り、辛い仕事をするという男

性の役割を果たさなければいけないことを、改めて思い出させる。同時に、キャタリーナは、人々が求める「理想の女性像」そのものへと変化を遂げ、女性のあるべき姿について「主張」をし、初めて褒め称えられる立場を手に入れたのである。『じゃじゃ馬馴らし』は、ペトルーチオがキャタリーナを馴らすという関係が主である。もしキャタリーナが心の底から変わってはいなくて、その従順な態度が演技だとするならば、その裏には、キャタリーナがペトルーチオやその他男性陣を馴らすという構図も見えてくる複雑な物語なのである。

参考文献

- ・ William Shakespeare, *The Taming of the Shrew* (参照 2020/10/16)
<https://shakespeare.folger.edu/shakespeares-works/the-taming-of-the-shrew/>
- ・ ウィリアム・シェイクスピア著、松岡和子訳、『じゃじゃ馬馴らし』、ちくま文庫、2010 年。
- ・ 小野良子、「キャタリーナのストーリー—『じゃじゃ馬ならし』を読み直す—」、『桃山学院大学文学部紀要 英米評論』16 号、2001 年、33－50 頁。
- ・ 金城盛紀、『シェイクスピアの喜劇—逆転の願い—』、南雲堂、2007 年。
- ・ 小林かおり、『じゃじゃ馬たちの文化史—シェイクスピア上演と女の表象』、英宝社、2003 年。